

許

子

集

全

中村俊定文庫

文庫 18

1004

4 5 6 6 7 8 9 140 1 2 3 4 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9



千々城上巻



星浦の海とてそよよや 晴るあそび

芭蕉

船洞あり 燈をともす 煙 火

安信

蕨の山とてあそびの 枝をたぐりけり

自笑

ちりちりたる 梅の 香を 舟のり

知足

雪のふりおとす 結月の 光をのぞ

兼言

多岐の 舟をりて 舟をたぐりけり

如風

一里のこゝ母波をり 川 舟をり

重辰

祠をたぐりて 門をたぐりて 舟をり

吾言

舟をりて 舟をりて 舟をたぐりけり

是言

舟をりて 舟をりて 舟をたぐりけり

信言

舟をりて 舟をりて 舟をたぐりけり

風言

月とけしむる 櫻女 酒
高細子甲とてけしむる 新乃終
けしむる物とてけしむる 櫻女
唐地とて西新谷とてけしむる
家本とてけしむる 櫻女 古枝
山とてけしむる 櫻女 古枝
辛陽とてけしむる 油とてけしむる 新乃
角とてけしむる 眉とてけしむる 櫻女
けしむる物とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝

信風言蕉風足辰信足風笑蕉

麻子とてけしむる 櫻女 古枝
けしむる物とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝
櫻女 終とてけしむる 櫻女 古枝

信風言笑辰蕉足笑蕉辰風足

まはれ卯の種をのこす

執筆

の

あつちやあつちやあつちやあつちや

如風

あつちやあつちやあつちやあつちや

蕉

あつちやあつちやあつちやあつちや

信

あつちやあつちやあつちやあつちや

重辰

あつちやあつちやあつちやあつちや

笑

あつちやあつちやあつちやあつちや

足

音仙馬の歌

あつちやあつちやあつちやあつちや

芭蕉

あつちやあつちやあつちやあつちや

業言

あつちやあつちやあつちやあつちや

知是

あつちやあつちやあつちやあつちや

如風

あつちやあつちやあつちやあつちや

安信

あつちやあつちやあつちやあつちや

自笑

あつちやあつちやあつちやあつちや

重辰

あつちやあつちやあつちやあつちや

信

あつちやあつちやあつちやあつちや

笑

あつちやあつちやあつちやあつちや

蕉

あつちやあつちやあつちやあつちや

足

あつちやあつちやあつちやあつちや

言

あつちやあつちやあつちやあつちや

蕉

あつちやあつちやあつちやあつちや

信

あつちやあつちやあつちやあつちや

揚枝をばあれちる何れも
小袖しちむれ風をもいと久し
こころを柳れりるを縁と
うき年を何れもちるも漸るに
又け軍を越えし女も
似てはまことし草を浪れも
翅成ゆりかへ一はり
三月の春を免ハ朝ハ夜載き
二度はしるも勅のりも
山より車子割る本を存し
燈あらしむる岩を折かく
紙津形を新婦法の朝露

足辰信足蕉笑信言笑蕉足辰足

柳かこころを春れもさむ
殿中けり月ハ昔れ影あらし
老の昔うたをり縁も折喜
ふすゆし櫓舟烟のちけり
陣のけり風を暮るをゆり
山よりよきありぬるを柳
守銭たすけぬんほるを
と國を海をちるも真開
は柳かこころを神は

笑言足辰信足蕉笑言
執筆

芭蕉海月とて一人を語り
三河由良の序にも蕉語
行良を誇るんとて名留るを
了むるを
揚枝をばあれちる

燈明中 浮良也 此言 くらげは 燈
明も くらげも 一 あり 一 此 燈
明を ぬく 力を 君う 子 此 一 一
以 乃 一 鳥 帽 也 然 一 付 一 一
眼 一 一 一 一 此 出 一 一 一 一
思 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

寂照庵 知是子 此 燈
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

寂照庵 知是子 此 燈
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

知是
芭蕉
超人
足
蕉
人

寂号
芭蕉
知是
野水

寂照庵 知是子 此 燈

主 是 中 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

寂照庵 知是子 此 燈

面 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

芭蕉
自笑
知是

寂照庵 知是子 此 燈

死なうくともうなほに在る可也

かきこもるもまゝのや 松 郷

轍士

隣子 冥途のうらみ 川 河

知是

清きぬくも上野の 葉を 入る

蝶羽

まのり 途の 冥途の 入り

泉母

不自由 とも 申す 月 市

安信

新酒 とも 入り 月 市

洗古

おは 松風 の 室も 冥途の 入り

團友

巨魁 とも 冥途の 入り

知是

妻の 冥途の 入り

高川

入る 冥途の 入り

如瓶

世草 冥途の 入り

是

冥途の 入り

在

二 奇仙界

初雪 冥途の 入り

知是

冥途の 入り

團友

冥途の 入り

安信

冥途の 入り

高川

冥途の 入り

紫雲

冥途の 入り

如瓶

一 奇仙界

冥途の 入り

冥途の 入り

知是

水衣花書のとけをみる、一雪
花の里へ病をうつる、かきうらうら
時をみる、いそぎをみる、さき
神のあはれをみる、いそぎの月
吹もあつぬ、浪花をあき風

短歌集

海をみる、星をみる、いそぎ
夕をみる、水をみる、鴨をみる
結を裁く、いそぎをみる、いそぎ
吹花をみる、いそぎをみる、いそぎ
いそぎをみる、いそぎをみる、いそぎ
いそぎをみる、いそぎをみる、いそぎ

長川
揚子
志見
天明
枕筆

舎羅

知見
安信
臨羽
龜世
柳子

新仙界

いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを
いそぎや吹花のつらさを

知見
臨羽
龜世
柳子
知見
安信
臨羽
龜世
柳子
知見
安信
臨羽
龜世
柳子

あつたりとたれせむるゆふ
何れとあつたりとたれせむる中
七つとたれとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと

是 空 通 空 是 空 通 空 是 空 通 空 是

芦花の中をたれとたれと
一羽とたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと
あつたりとたれとたれとたれと

是 空 通 空 是 空 通 空 是 空 通 空 是

大年の夜は多し竹影は
居候りぬるけりぬ
葉の戸子乳と春物女子と
りきつゝしるる歩時七部
山崎を伊中へ歸りて
葉をけぬるせめては
帰妹を女を月とて
名を侍もつて
おのれは
村をぬるる
物をもかゝる
るを括りぬるる

是 信 笑 言 信 辰 信 辰 笑 是

とて居候りぬるる
の明か
知りて

言 信

杜若の竹を
まはるる
二つ
か
終
此
於
念
及

芭蕉 知 是 相 葉 叩 端 業 言 自 笑 如 信 宿 信 室 辰

そ者女楽の書と段はも
か後と節か少能れうの書や
早よかそあうハ百れ 歌
敵透の燈籠三ツ出た
こそあふ親の月出り
其後の秋すれう多打の梅
猶も〜 猶も力も〜
多節種も書と〜 女志の書
祝〜 節と書惜す
燕の籠と〜 羽と〜
兔書と〜 書と〜
と〜 書と〜

信 蕉 端 言 葉 燈 足 辰 端 葉 足 蕉

わりの海もあふれ
あふり書もあふり
そはれ外函たの書と〜

足 尖 燈

あ〜 一 節と〜 子書と〜 真珠屋の書
お心せ〜 一 節と〜 書と〜 書と〜 書と〜
後屋敷の書と〜 一 節と〜 書と〜 書と〜
敵透の書と〜 一 節と〜 書と〜 書と〜

川流や所尾〜 書と〜
あす〜 書と〜
鶯は〜 書と〜
あは〜 書と〜
あは〜 書と〜
あは〜 書と〜

知 足
如 家
全
全
足

歩北男中... 結河の四柱申... 持不流連... 存存... 湯...

波 榮 良 堂

二日... 一斗... 仕合...

酒 半

流... 餘... 餘... 妻... 月... 華...

許 六 芭 蕉 風 系 六 堂

桐... 振... 西... む... き... 東... と... ろ... 改... 村... 堀...

原 蕉 六 堂 蕉 六 堂 蕉 六 堂 蕉 六 堂

薦傳其あしとるたあ妻其未
今ハ砂好と川の泉
うり新法獲つ風を清無し
又ヤ子かきと四玉申し
好高きめは海とて産其も
まふれし印子とてとる妻の粉
まふれし結まのつとて井戸の結
月おとせまを法と探し出
ちとりのと結まをうあをたて
先結かきとての物成
うつすうと門の尾とて結
言教まよか結とてとる

蕉 六 葉 六 葉 六 葉 六 葉 六 葉 六 葉 六 葉

今後り学相識とてつとて
まふれし産子産もかき結
産極し本まう字由る堀の内
日とあし出る二月朔日
初おと作留の地とて結
初樟まよやとて女川のさ
ま梁とて結
口切とて結其産とてつとて
竿つとて結其産とてつとて
山産其産と結其産と結
新の結とて結とてつとて
産人の結とて月と結

蕉 六 葉 六 葉 六 葉 六 葉 六 葉 六 葉 六 葉
芭蕉 支梁 嵐茶 利合 洒茶

とつてはしるくともはたし
この信村来す福福とらん
程もまじりたしとけり
暖まほしおぬた身つりて
池水小隅の芥のあきき
燈付の燈多しおぬの月
風もまじりてはつたけり
老僧の鳥帽もはたけり
古刹の申す深きまじり
六月のぬたのまじり
まじりてはたし
擲するの暇もまじり
標せらる

即徑
去来
空
聖堂
空
史記
空
景况
空
素斗
空
之道

時の馬もまじりてはたし
枝の松もまじりてはたし
二軒もまじりてはたし
雪よまじりてはたし
まじりてはたし
後入まじりてはたし
まじりてはたし
里まじりてはたし
まじりてはたし
松の中
まじりてはたし
曲翠
酒

空
車庸
空
標志
游刃
正房
即言
那経
昌房

津より歩静るる水に動きて
臨舟月照りたり其風は涼あり
頃の高石より巻かへりて
虚云のくく北歌をきく
樽陰より坊路をぬき世
多無舟夢をなまらけり
入道堂に流りしを歌
しるすつげし後さへうま
ちのうとてまはれり終るに
まはつりてまはれり世
緋の垢垢をぬき舟の中や
能なりしを流せりて船

出臺
枝 列 臺 枝 列 臺 枝 列 臺 枝 列 臺 枝 列 臺

多雲を島にのりて
或歌うまは流りて
月も八里をうりて
酒よりまきりて
一房得る油也と
高舟二階舟裏に
いつの日う静りて
顔もぬりて
らるる草花を
かきまはる月夜
礼をうりて
は

枝 列 臺 枝 列 臺 枝 列 臺 枝 列 臺 枝 列 臺

布衣のも能く人の浦を
依りて自のむしりたり
もつぬ物とてつる海を
人の思ふは角をさす鹿
妻の目も家娘したる目
交しつるもつる路うち
馬の歌も成る中りも
越せ毛坊の情はふさよ
月の香痛む程を押さす
田く燈をさす家の心
萬戸の書鳥惜みはるる
中りつるもの味う飽

枝 列 春 素 枝 童 列 春 素 枝 童

うらみ手袖を堪せせうん
食ふ事とてす都はこつ
碑狂ハ指印は此
朽まをさすは幸時
初時を指さるるおも
吹く道はしは天
猿花をぬる身と形
茶を割る居は片
うらみすは杜を
山とあはれ目
人の子乃を降お

別 春 素 枝 童 列 春 素 枝 童 四 臨

洗ひすとせしむ河能い味水又
自らも此の聲もききもよきと
木絨師のきききききききき
此れ月八身をわけしうきき
秋此夕と歌あききききき
歳後も小調をきききききき
岸此夕と歌あききききき
山科の弦あききききききき
ま川あきききききききき
あきききききききききき
高井福海とまききききき
時きききききききききき

少枝 江尔 漁川 物童 李东 岸 枝 尔 川 童 东

お撲はきききききききき
けきききききききききき
まきききききききききき
まきききききききききき
はきききききききききき
照傳もきききききききき
岸まききききききききき
山此れきききききききき
浪の歌あききききききき
義至者此れきききききき
又仲人きききききききき
高井福海とまききききき

枝 膳 川 尔 枝 膳 童 东 尔 川 膳 枝 童 东

月夜鳥もあられなく
身もあつてはうきうき
とてあつてはうきうき
とてあつてはうきうき
とてあつてはうきうき
とてあつてはうきうき
とてあつてはうきうき
とてあつてはうきうき
とてあつてはうきうき
とてあつてはうきうき

枝 騰 川 臺 東 尔 騰 枝 臺 川 尔

一、冊終

元禄五申々

十月三日許六亭真行

りあまうう人も年よれ初うら
此の仕付もあつてあつて
油もあつてあつてあつて
汁の煮もあつてあつて
富もあつてあつてあつて
先もあつてあつてあつて
七もあつてあつてあつて
焼もあつてあつてあつて
寝もあつてあつてあつて
寝礎もあつてあつてあつて

許六 酒堂 岱水 富茶 水 爲 六 堂

志のまよふつゝ思ふ神よみ来
七十の如く七舌を草茎より

四金

龍舟や此良よりわがまをりし
七舌浦納を赤せ給ふこし給
酒をとりて附くま草茎年しそと
よみ此五つより持ぬあせせる
自書を授け給ふ神の御座り
一城つゝも四十荷一層こ
多きまは後より此子給をるま
やまも此供よまのつゝも
門は此給をるま高き者

草

李由

許去

改野

徐宣

六

由

宣

野

由

而やま計る目妙七章四
世第後のもよ此ちりくもるまのま
さんまの庭にまあま。小堂
川原に異用する男給を
肩を風をるま後此出代り
大坂の赤給のまき給のま
月あま供るま此此中
一ま。老樹のま此此
池の四まま。蛙鳴るま
永り此十の給ま。つゝり
思くし碑を此を
此ま。小人のま此此

六

村

宣

六

由

宣

村

六

由

村

宣

由

喉を六の附々の破くもあつたを
かりきつる番所の坂
用ひの包指の礎を降て
玉ふれ鼓のまき掃 溜
何るもひの鼓をまき掃
日中商人のりきつる
流家館をりきつる
路角をりきつる寺れまき
まきつる内取の水の流を
碧峰進出すれりきつる
秋さきあつたふれを
降入あつた二井の坂を

六坡半六坡半六坡半六坡半

一ふりのりきつる
やまをりきつる
輝峰のりきつる
まきつる所の高合
まきつるを過つる
まきつるを過つる
旅人のりきつる
法界のりきつる
高得のりきつる
破のりきつる
根多城水のりきつる
痺癢をりきつる

坡全六坡六坡六坡六坡六坡

惣隔はそやをむやの梅るの中
まゆつゝハ度支 袴あり
一年の苦油管迄むすつり
ゆきれ袴子の 鳴きこるるきり

六 坡 六 袴

と 吟

唯とらんこゝる 袴の せきり水
より此を度支の ぬき 板
よりあつる所の 子 鞋袴やうて
ま方う残と 腰中 巻
そ切を灯とりのすよの 袴 白お
ゆる袴の上と 丁 海 あり
このせつと 曹 洞子の 甚ハ 海と

本通等
朱袖
許六
袴
袖
六
辱

甚つたつて又 甚研 せきり水
又 甚ふいて 下 女ハ 袴 ありあり
は 出 度 あり あり せむく
若こく とも 糸を 入る 甚 袴
は 袴 一 昇る あり 袴 物
能く 多し 袴 袴の 袴 袴の 袴
袴も とも ぬ 袴 袴の 有 明
袴の つ 袴 袴の 袴 袴の 袴
海村の 袴 袴 袴 袴 袴
袴 袴の 又 門 袴 袴の 袴 袴
袴も とも 袴の 袴 袴の 袴
袴 袴の 袴 袴の 袴 袴

六 袖
辱
六 袴
辱
六 袴
辱
六 袴
辱
六 袴
辱

あま井申さうに夜もせ・夜
まこせのま持ハ時ハ時うけて
あま能くも影月割の帯
心あま戸板の上北鏡すのり
すも豊喜平 秋北物終
清前さる鬼と寝く月を
矢口の星よりくる玉川
赤粒のあらくるるるの井
柳ませ細の口さる 柳
務をさ若地走する 藤の若
解毒の礼と藤まハする
烟湖珠のまらうさるる羽織

袖六 厚六 袖六 厚六 袖六 厚六 袖六 厚六

あまうさるまを女美大 黒心
三月のお倉ハ解ハ極うさ
佐和山さる田の甘麻さる由る
まをさるはましく料と引知し
まらうる北洋 つら年

袖六 厚六 袖六 厚六

妙法ま吹すのさるさるの月
川系柳の一ちまらさる不
お撲さるの節をさるさるさる
まらう北夜まらる藤の並
かしとさる伯父の路を丸めりり
能するやうさるのま 翻心

浪野 許六 亦道寺 村 六 厚六

以^レ知^ル一^ノ所^ニ於^テは^モ亦^モ一^ノ田^ノ葉^ノ
後^ニ亦^モ後^ニと^シ潤^シ水^ノ形^ノを
危^クある^所ハ^ハ潜^シ流^シハ^ハ繁^ク
里^ノハ^ハ子^ノ疎^クと^シ光^ルと^シ其^ノ中^ニ
若^シ田^ノハ^ハ之^ノ世^ノ戸^ノと^シ城^ノノ^ノ形^ノを^シ
五^十五^十と^シハ^ハ亦^モ之^ノ先^ニ 忽^ク
去^リ番^ノと^シ去^リ何^レハ^ハ一^ノ年^ノの^ノ内^ニ
去^リ其^ノ中^ニ一^ノ月^ノに^シ終^ル事^ノを^シ
灯^ノ籠^ノの^ノ果^ノを^シの^ノ地^ノを^シ是^レ
白^川石^ノに^シ名^ノの^ノ高^クり^き
む^クと^シ亦^モ其^ノ法^ノを^シの^ノ法^ノ福^ノ状^ノ
也^レ代^ノ時^ノに^シ外^ノの^ノ其^ノハ^ハの^ノき^レ

村 六 村 六 村 六 村 六 村 六 村 六

よ^リ其^ノ路^ノは^ハ日^ノの^ノき^レは^ハ後^ノの^ノき^レを^シ
津^ノ由^ノを^シの^ノ形^ノを^シ一^ノと^シや^リ
地^ノを^シを^シを^シを^シ 城^ノ 下^ノ
の^ノき^レと^シ指^シ業^ノ仕^ノを^シ見^ルと^シ
む^クと^シ其^ノ中^ニと^シや^リと^シや^リ
其^ノ中^ニや^リは^ハ作^ル流^ノ人^ノを^シ
又^ハや^リと^シと^シと^シと^シ 程^ノ
其^ノ中^ニ水^ノ増^シを^シ一^ノと^シの^ノ自^ノ
形^ノを^シ七^ノ路^ノの^ノ十^ノ業^ノ七^ノ身^ノを^シ
飲^ル海^ノの^ノ大^ノ井^ノを^シ好^クき^レ浅^クき^レ京^ノ
小^ノ路^ノの^ノ形^ノを^シと^シと^シと^シと^シ
言^フ其^ノ中^ニと^シと^シと^シと^シと^シと^シ

村 六 村 六 村 六 村 六 村 六 村 六

河走りも心きき支那の善く取
去年の夏七家とてとるまの
中町の堀巻の末ハと見り
つけよ七轆るまの道あり

力とて塗

諸名を宛内名とあり牡丹
細の源しき水たははく
西郊の軍法吐しお折る
秋もやうく湯を腐り内
茶の心とてとるまの道あり
焼むまの七家とてとるまの
いこくと後殺る物とてとるまの

六村
六

毛純

兼島

程己

許六

三

六

武士の節々をとりてつづまの
水もあきけりまのたのまの
よきまのまのまのまの
月まのまのまのまの
五年の中まのまのまの
まのまのまのまの
酒とまのまのまのまの
まのまのまのまの
一本橋まのまのまの
山越のまのまのまの
戸板平目七橋まのまの
明後まのまのまのまの

己九己
己六己
己六己
己六己
己六己
己六己
己六己
己六己
己六己
己六己

おのゝゝゝゝゝゝの 籍は
とやかくとらぬと日とあつた平のそ
只身代ハまゝあせ 簡 畧
修得の比也。あゝもあゝれ
縁のあゝゝゝもむすのほ
まゝゝゝ下弦の自死お明方
松茸 結る 妙を あせ 山
早入のさゝゝゝ字後の 楊枝
仰那のりゝゝ 縁は かくあゝ
深さの やつれ 早ゝゝ 早 白集
早 妙も けゝゝゝ 妙の 妙も
一町 早 茂は ちす 早 儀

六 紙 之 六 已 之 紙 已 六 紙 之 六

順を 通す こと 湯 の 湯
うゝゝゝゝゝゝゝゝの 早の 早の
幸得 妙は 妙は 早の 早の
よゝゝゝゝゝゝゝゝの 早の 早の
早の 早の 早の 早の 早の

六 之 已 紙 已

二 嘘

志由ん せゝの 籍は 海は 志由ん
日向の 照ゝゝゝゝ 新は 功を
まゝゝゝゝゝゝゝゝの 早の 早の
中ゝゝゝゝゝゝゝゝの 早の 早の
力の 妙ゝゝゝゝ 早の 早の
早の 早の 早の 早の 早の

許六
李由
六 之 已 紙 已
由 全 六 全

上もさうさうむつひのむすり
 死らうらえ七布とむす
 ちやうと浴七階と民にけり
 寝さすはくさる屋法高し
 煙合ふあぢ方影を仕籠を
 鳥帽を籠籠のむつ入つする
 五層の若神山七層の山
 さうさうさうさうさうの十五
 物屋のまゝあつたもさうさ
 草羽織さうさう江戸のさう
 さうさうさうさうの市の四ツ
 物さうさうさうさうさうは

全 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六

白の物さうさう持物さうさうのさ
 さうさうさうさうさうさうさ
 上緋のさうさうさうさうさ
 さうさうさうさうさうさ
 さうさうさうさうさうさ
 さうさうさうさうさうさ
 さうさうさうさうさうさ
 さうさうさうさうさうさ
 さうさうさうさうさうさ
 さうさうさうさうさうさ
 さうさうさうさうさうさ

全 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六 六

醬油の二番もある物も
田舎の味は得たこと
るをの味は是より佳し
この味は通る家である士
富の大名の時に味は出さ
分法はよくしるべき事

亡師の回忌報恩

月を漸くしるは
少すせ望みの事
お級同士の序用
物のふるはつ徳も

六由六由六由

許六

李由 木通寺 朱袖 波野

きふ下蓮は人押
赤くは烟を揚る町
おめつては羽子も
粉のふちあき生房
春日集ある迄者の
くあせはるは城の
外郎堂は帯は先く
その後と取るとは
松たつとては
村の白は村中
いつつとては
鳥さしては

馬佛 朱島 胡布 毛紙 程己 保良 六由 尊 油 村 傳

一歩の歩みももろくも
を清くしるはれは洗濯
有るも細くも其国
佩極^{タテ}れしは清く川紙
味も極^{タテ}れしは明く
うらむの掉も極^{タテ}れしは古
もくももろくももろくも
いひもやす清くも食を
早まもあはれも極^{タテ}れしは
黒い中もあはれも極^{タテ}れしは
お宮の所の山は極^{タテ}れしは
清くももろくももろくも

島 布 紙 己 寅 六 由 厚 油 村 俣 島

本曾我あまかろ批極極
多くもあはれも極^{タテ}れしは
黒くもあはれも極^{タテ}れしは
清くもあはれも極^{タテ}れしは
門の外もあはれも極^{タテ}れしは
あはれもあはれも極^{タテ}れしは
其名もあはれも極^{タテ}れしは

布 丸 己 寅 六 由 筆

馬俣追俣

千能もあはれも極^{タテ}れしは
時もあはれも極^{タテ}れしは
其中もあはれも極^{タテ}れしは
湯桶の酒もあはれも極^{タテ}れしは

李 由 浅 正 許 六 朱 細

擔瀟下款
寫畢休
函定厚重
作詩因
今宵我亦
醉
名浪一穩
以就
以就

臨居れさば上流子書信御書此す〜大のあき大
情もや〜うけし門北入湯柳傳て旅う辰す砂
のさ〜お入の跡もひら〜世の西之島に妻新成
以相も板敷の底を隅〜ととる〜らす天丹ふすま
るり〜まき〜のき〜新形〜い〜九段の心〜ひら
惚〜〜し〜浅土買ま鞋堂ふせ〜のち〜や〜く〜木物〜を
を〜よ〜き〜入〜れ〜い〜〜の〜ま〜ま〜を〜破〜出〜る
七〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ぬ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

大名れおちもあ〜〜〜

道〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

福の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜お〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
ハ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
世活〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
け〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

河〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜天〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
此〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
民弱の甲〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

山

正長北新後崩すぬるまの

野坂

とわんしんはたかたあまのついで

まきくの水鳥をくくまをさか

利牛

こまみ山の巻

あけや沖うらまき山のまは

甘角

まきくまはまきくまのま

治化

まきくまのまきくまのま

尾を

まきくまのまきくまのま

柳藤

まきくまのまきくまのま

まき

まきくまのまきくまのま

角

まきくまのまきくまのま

化

まきくまのまきくまのま

堂

まきくまのまきくまのま

海

まきくまのまきくまのま

本

砥石山の巻

まきくまのまきくまのま

曲日平

まきくまのまきくまのま

治化

まきくまのまきくまのま

正長

まきくまのまきくまのま

即言

まきくまのまきくまのま

胡故

まきくまのまきくまのま

翠

まきくまのまきくまのま

言

まきくまのまきくまのま

唐

ふらふらとてを理よ持て
存れよの振ふひすは海あり
高うけとやあはれ七文
此處をよみ通る能の能

來 空 化 空

こころこまのむ月かたのふまは日
旅あすたすくまは旅あまの百々日
道徳のまじり空北枝のまじり空
このりれ他言とあま

昂真

岡城す歌れしや梅の
春もあふあつといけ
田と通するれ結まら
存つる方とやのか
ふ水の二番とま月れ

少枝
浪化
旬空
林紅
物

梧桐屋の秋のまけ
お明のおあまはせ
言のまのいふ月とむ
借のまのまかの枝
袷のまのまの旅
ふらふらとてを理よ
高うけとやあはれ七
此處をよみ通る能の
思ひのけあまの
すのまのまのまの
度もまのまのまの
ちのまのまのまの

華 化 枝 紅 空 枝 空 化 空 枝 空 化 枝

欲る者一喰ふ能く此の事
さふかす兵具のつらさかきけ
つらさかきけはなれはなれ
事なほほらちのつらさかきけ
甲子孫ある事の辻 事
法若れ家徳の連なり
奈ん事なれはなれはなれ
あめつけの少ふらん
一 事なれはなれはなれ
うたふ事なれはなれはなれ
はなれはなれはなれはなれ
つらさかきけはなれはなれ

空 枝 亭 空 化 童 枝 童 化 童 枝 童 化 童

蘇のつらさかきけはなれ
事なほほらちのつらさかきけ
上つめはなれはなれはなれ
船中はなれはなれはなれ
うたふ事なれはなれはなれ
法若れ家徳の連なり
奈ん事なれはなれはなれ
あめつけの少ふらん
一 事なれはなれはなれ
うたふ事なれはなれはなれ
はなれはなれはなれはなれ
つらさかきけはなれはなれ

空 化 枝 空 童 万平 紅

蕉翁の海稀屋の偶指し録の序
多の事ありて之を若く之の情をむす
多の事ありて之を若く之の情をむす
序終に一書は之を若く之の情をむす
とて之を若く之の情をむす

蕉翁の海稀屋の偶指し録の序

去来

那知の海稀屋の偶指し録の序
多の事ありて之を若く之の情をむす
多の事ありて之を若く之の情をむす
序終に一書は之を若く之の情をむす
とて之を若く之の情をむす

蕉翁の海稀屋の偶指し録の序
去来
蕉翁の海稀屋の偶指し録の序
去来
蕉翁の海稀屋の偶指し録の序
去来

輝きやきりふれ言新
あつれききせうかき弁
持持るれけし兼何人きりて
まゝとらくともみけしつ
はるせきし同と月つま

ませ成

山店
史新
岩弁
春活

毛髪のとせれえゆる堀くら
丁海むるい平世久法寺
史とまきれ味増つつせり
善清物をあしとある大吹弁
とほちとほのあしな山せハ
松南れをえ枝あし一里結
田持れ南きお能あそぬる
互れ月ひしぬ首の望あきけ
とまき波しとるきねく
藤あやま相枝山もちつき
とすうらえと知ぬ顔す
とつとよ酒毒とちまをあつ

靴子
店
新
行
結
店
新
浩
行
新
店
行
新
行

年子まひけき量机新く
清澤地のもも酒より新を家
敷て賑かくなれば 甚
とある人あつらんせむ子新機
たよく件のあひと見れ若
無人のいつの海よりとぬる
又引廻るはけけけけけけけ
各事ハ取寄るもつとる小短長
かゝれとふれ自とるあり
權のあれたらと踏歩新
以^ス海^ノのまをけを新のよも新
重き人の山の踏うすも新にし

浩店 邦浩 行 邦店 行 浩店 邦

千日谷れ 銀杏 あり
海よりとあるてめも 銀
進く 匠よりとるやら新
ひらくと見れいつの 椿
野あり申す 椿 新 田
新より申す 椿 せぬ出
夕日せぬふや 椿 せぬ

行 店 邦 行 店 浩 邦

ぬみんの机取新ハ新よりとるいつとみとる
新よりとる新よりとるいつとみとる
いつとみとる新よりとるいつとみとる
本角れ新ハ新の若き表ホ新の机取新ハ新

此處此魔のあつたところをみして極楽を願ふ
唯百残は多くけしむ極楽一神を念ふと結ぶは
ゆかりの風情は終るをうらむんとは

雲をたうとすゆきふくむるは

七巻

伊賀新大仏の地

伊賀の玉河波に居る新大仏といふありはるゝの
都東大寺の御り傳ふ上人の四巻といふ舊里に
通る城の四友字を宗無とてありはるゝの地
か此地もむ。仁王門撞撞のあはは極る。その地
我とふうらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。

此の地をいふは仏のあつたところ。岩窟小なり。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。
わらむとせむ。わらむとせむ。わらむとせむ。

よその地をいふは

七巻

極る。ゆきふくむるは
よその地をいふは

七巻

七巻

七巻

又もくちやう 後をゆくすま
一けり 新をゆくすま 新 者
八専 あきと 晴くくくあり
海をゆく 新少 世の 新 所
海をゆく 海をゆく 之は ぬり 世
海をゆく 海をゆく 海をゆく 海
とくくも 八専 所の 新 者
新 世 山 山 山 山 山 山
新 世 山 山 山 山 山 山

餞別

新 世 山 山 山 山 山 山
新 世 山 山 山 山 山 山

山 店 新 行 新 店 行 新 店 行

山 店 新 行 新 店 行

馬 附 世 山 山 山 山 山 山
四五 子 石 世 山 山 山 山 山 山
方く 一 医 者 引 手 苦 の 自
確 の 在 法 海 も 切 り 世 山
多 世 世 世 世 世 世 世 世 世
海 生 不 意 世 世 世 世 世 世 世
温 の あ き 世 世 世 世 世 世 世
也 波 づ 條 力 世 世 世 世 世 世 世
新 世 山 山 山 山 山 山 山 山
新 世 山 山 山 山 山 山 山 山
新 世 山 山 山 山 山 山 山 山

店 蕉 店 蕉 店 蕉 店 全 蕉 全 店 全

神鳴れおのろしき河原も
 志やううらんそふう輪も
 吾れ能くつくとさきし
 とおろしううらんひま
 吾れおのろしき河原も
 うせううや湯清くらん
 いおろしううらん
 圓つともあつた
 ういひううらん
 公のあはれをつとむ
 ううううううう
 ううううううう
 ううううううう

蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店

取二重北条をうらな
 着い時う神をうらな
 能く又強まらん
 留まらん山をうらな
 日えらんからうらな
 うれううううう
 ううううううう
 ううううううう
 ううううううう
 ううううううう

蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店

元禄七文月七日おぼろ雪天ふら白浪浪河の
 吊初姑七日雨日

岸をひらき鳥籠も栲杖とありて一室を籠りて
ふきとてしるべき二星も庭形をうしなせり
そを月影と見よとさる人も袖おけり一燈のりき
流るる水も一通眼や所りきと吹する人もあり
そを水と見よとけ二星と見よと見よと見よと見よと
さるる水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと

さるる水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと
さるる水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと

通眼の歌

七夕のまきものうらと結を羽
西はれと申す栲杖やその川
秋風
安邦

岡岡之説

色ハ君子の徳也心ハ仁也心ハ仁也心ハ仁也心ハ仁也
とも流るる水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと
おほいなる水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと
のふれ白くしる水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと
明のあつた水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと
まらぬ水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと
老の牙のぬきと見よと見よと見よと見よと見よと見よと
おれ情をのきと見よと見よと見よと見よと見よと見よと
今もたす水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと
解年一けり水の老のあつた水と見よと見よと見よと見よと
又十年十年の解年一けり水の老のあつた水と見よと見よと
まのさるる水と見よと見よと見よと見よと見よと見よと

山月や門まきし山湖がら

全

ま書きしむるは

まのけと名月あつさ鳴のふ

全

山月や門まきし山湖がら

全

世はまはるいそそそのは

多崎よりまゝあそびて

かも川や有るそせありあり

全

左様ささるはる時年中そそ

あまのやたそおもこの月

全

望月十六あはの辯

望月の妙息なるとは二とまのそそて舟を望
田の浦はまはる日申の時そそふ何果はま

成るまの人の家のうらよめは 酔翁狂歌月あり

うらよめはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

きよはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

さけあり 望月の妙息なるとは二とまのそそて舟を望

うらよめはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

月浮はるまのうらよめはるうらよめはるうらよめはる

相見れあそびまのうらよめはるうらよめはるうらよめはる

水蓮はるまのうらよめはるうらよめはるうらよめはる

難をうらよめはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

まかそはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

おのうらよめはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

うらよめはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

うらよめはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

うらよめはるうらよめはるうらよめはるうらよめはる

白き子先は澄きと後しは
そとあつたもろく——
椀のりまのりおきり
あつたもろく——
おぼひのりまのり
百里もろく——
引割——古佐
うりもろく——
ろくろくろくろく
ろくろくろくろく
ろくろくろくろく
ろくろくろくろく

蕉 水 舒 水 蕉 水 蕉 水 蕉 水 蕉 水

おと申す解を七申す
二おとす七解を七申す
おとす七解を七申す
おとす七解を七申す

蕉 水 舒 水

